

『エソポのハブラス』における 「シテ＋存在詞」形式の意味

李 忠 均

1. はじめに

中世は、日本語の歴史の中でもさまざまな変化が現れている。柳田（1986）（1991）、山口（1997）などによると、それはいわゆる時間の意味を表わす助動詞の場合にも行われ、「キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リ」のうち、ツ・タリを除いて徐々に衰え、口語資料ではタリの変化形「タ」だけが残って広く用いられるようになった。特にタリ形は、アスペクトの意味からみれば状態を表わす意味から運動の完成を表わす意味へ、テンス的には現在を表わす意味から過去を表わす意味へ、そのテンス・アスペクトの意味が変化している。そのため、動詞の連用形にアル・イルなどの存在詞がついた「シテ＋存在詞」形式が、それまでタリが担っていたテンス・アスペクト的な意味表現の形式として使われるようになったといわれている。

本稿では、このような事実がキリシタン資料、特に西洋文学翻訳の最初のもので、こなれた口語訳のローマ字書きで、日本語学上重要な資料である『エソポのハブラス』の中でどのような様相を呈しているのか考察してみる。方法としては、各「シテ＋存在詞」形式が会話文と地の文のなかで、通説のようにそれぞれアスペクトの意味を持っているのかそれとも他の意味があるのかを判定した後、アスペクトの意味を持つ場合は、鈴木（1999）（2004）の分類により、動作パーフェクト、状態パーフェクトなどのパーフェクトの意味・動作の継続・単なる状態などに分けて考えてみながら、アスペクトの意味を持たない場合はどういう意味を持っているのか考察する。その際にテンスの意味についても、アスペクトの意味との関連や、コンテキストなどを考慮した上で考えていきたい。

1.1. アスペクトの意味の分類

鈴木は、タリ・リ形の時間的意味を大きく「パーフェクト」と「単なる状態」と「継続」の3つであるという枠組みで説明する。そのうち、パーフェクトについては、主体の変化した結果がもたらされる状態の継続を表わす「状態パーフェクト」（例①）と、後続する段階において何らかの効力をもつ運動が先立つ段階において成立したことを表

わす「動作パーフェクト」との意味にわけている。さらに、動作パーフェクトには下位区分があり、「運動の完成と結果・痕跡の存在」(例②)「経歴・記録」(例③)「強調的過去」(例④)のような意味があると述べる。「パーフェクト」以外の「単なる状態」

(例⑤)は、状態パーフェクトと同様に状態の持続を表わすが、運動の成立を前提としない持続を表わすものである。「存続」(例⑥)の意味は、いわゆる動作の継続の意味が具体的、1回的な動作の継続を表わすのに対して、主体の内部で繰り返され、恒常化された思考活動などの継続を表わすものである。

①「…さてはひきぼしなどや残りたる。少し賜へ」と言へば、(落窪・一)

②乳母、「仁寿殿の女卿の、『女一の宮の御産屋の残り物』とて賜へるぞや」とて、引き開けつつ見て、(宇津保・蔵開・上)

③帝、驚き愛でさせ給ふ。「…行正、いときなく唐土に渡れりと言へども、まだ年若くて帰りまうで来たり。…」とのたまはするほどに、(宇津保・吹上・下)

④「御車率で参りたる」と申せば、「今雨やみて、しばし待て」とて臥したまひつれば、(落窪・一)

⑤中務官「などかは、さのみ、座のいたく下りたる。…」。(宇津保・蔵開・上)

⑥女は心優しく、いかにせむとおぼえて、わななかるる気色もしるけれど、「何か、かくうとましとは思いたる。…」とのたまふ。(源氏・胡蝶)

(例文は鈴木(2004)による)

2. 会話文での「シテ+存在詞」

『エソポのハプラス』のなかで「シテ+存在詞」形式は、会話文と地の文とで均等に分布するわけではない点から、会話文と地の文とに分けてその用法を検討していくことにする。まず、会話文における「シテ+存在詞」の使用様相は、シテイル形とシテゴザル形に限られている。

2.1. シテイル形

会話文のなかでアスペクトの意味として、動作パーフェクトの意味を表わしている例はなく、状態パーフェクトの意味を表わす例は、つぎの2例である。①は、野牛の母が出かけるまえ、子どもに注意する場面であり、アスペクト的には、変化動詞「閉じる」が用いられ、対象を変化させ、運動が完成した結果の状態を表わしているので、状態パーフェクトの意味を表わす。②は、主人が食べようと思っていた熟柿をエソポが食べてしまったと思い、エソポを叱っている場面であり、思考動詞「思い切る」が用いられ、

過去という別の次元で熟柿を食べようと決意していたという意味になるため、アスペクト的に状態パーフェクトの意味を表わしているといえる。

①野牛の母草を食らいに野に出るとき、子供に言い置く様は、「この穴の戸を内よりよう閉ぢてゐよ。何と外より呼び叩くというとも、我が声と、またこの様に叩かずは、粗忽に開くな」と言うて出た。(489-6)

②さて主人、風呂から上がり、件の柿を湯上りに持ってこいと言われるれば、右の二人の者どもが、犯さぬ顔で申すは、「それをばエソボこそ盗んで食べてござれ、」その時、かの主人は腹に立てしこって、エソボを召し寄せ言わるゝは、「いかに畜生な、みぢれな悪戯者、身が賞玩しようと、思いきってゐたその熟柿をば、なんと思つて取つて食らうたぞ」と気色を変えて叱らるれば、(411-3)

以下の例③は、アスペクト的に継続の意味を表わしている例であり、例④は、単純状態の意味を表わしている。③は、シャントの妻がシャントの行動に腹を立て、親戚のところへ行っているのをエソボが訪ねた場面で、「している」は「別居している」の意味を表わしていて、アスペクト的に大規模な動作の継続の意味を持つ。④は、エソボがシャントの妻に、シャントが新しい妻を迎えようとするといううそをつき、仲を直させる場面である。「生きている」は、運動の成立を前提としない持続を表わしているので、アスペクト的に単純状態の意味である。

③かの人家に走り返つて、然々と語れば、女房これを聞いて、「げにそれはさぞあるらう、こうしてゐるさえ腹の立つに、我が目の前で、別の妻などを持たせてはありやうものか？とかく余の女房をシャントの家へ入れられてはなるまい、ただ行け」と言いさまに取る物もとらず、(425-4)

④走りぢだめいて家に帰り「如何にシャント、我がまだ生きてゐるうちに別の妻をば何としてお持ちあろうぞ？思いもよらぬことぢや、叶うまじい」と言うて、その時に及んで人も直さぬ仲を直られた。(425-9)

会話文でのシテイル形のテンス的な意味は、そのアスペクトの意味にかかわらず、シテイルは非過去の意味を、シテイタは過去の意味を表わしている。

2.2. シテゴザル形

例⑤～⑨は、シテゴザル形がアスペクトの意味を表すとすれば、後の段階において何

らかの効力をもつ運動が先立つ段階において成立したことを表わす動作パーフェクトの意味を表す例である。⑤は、主人が食べようとした熟柿をエソポが盗んで食べてしまったとうそを報告する場面で、「食べる」という行為動詞が用いられ、丁寧な意味を表しながら、アスペクティックには運動の成立に重点を置く動作パーフェクトの意味をもつ。つまり、「エソポこそ盗んで食べてござれ」はル形のシテゴザルが用いられ、「エソポが盗んで食べて、今はない」という結果に重点を置いている。⑥は、エソポがシャントの命令で風呂に行く途中、宿者からどこへ行くのか聞かれたとき、知らないと答えたら、宿者がエソポを牢に入れようとする場面で、「答える」という通達動詞が用いられ、この例も⑤と同様に丁寧な意味を表しながら、アスペクティックの意味は動作パーフェクトである。⑦は、エソポがシャントに、風呂屋の前に石が出ていたが、ただ一人だけそれを捨てたので風呂屋に人は一人しかいないと報告したと弁解する場面であり、行為動詞の「捨てる」が用いられ、「捨てて、現在はない」という意味になるため、アスペクティックの意味は動作パーフェクトである。⑧は、エソポがシャントに珍物をシャントが大切に思っている犬に与えたと答える場面で、行為動詞「渡す」を使い、「渡すという行為をして今は物を持っていない」という動作パーフェクトの意味を表す。⑨は、エソポがエジプトの王にエジプトが要求する建物を造営する人を連れて来たと言う場面であり、「召し具す」という移動動詞が用いられ、シテゴザルを用いながら、「召し連れてきて、今いる」という動作の結果に焦点を置く動作パーフェクトの意味を持っている。

⑤さて主人、風呂から上がり、件の柿を湯上りに持ってこいと言われれば、右の二人の者どもが、犯さぬ顔で申すは、「それをばエソポこそ盗んで食べてござれ、」(410-24)

⑥すでに籠者になさうとするところで、エソポが言うは、「わたくしが只今知らぬと申したことは、かように籠者せられうことを弁へなんだによって、知らぬとは答へてござる」と言うたれば、(416-23)

⑦出入りの人の仇となつたをたれも取り捨ていで人毎に躓き倒るれども、顧みなんだをある人一人きて取つて捨ててござれば、知分程のただ一人なことを申した」と答えておぢる。(417-15)

⑧エソポを呼び寄せ、「先の贈り物をば誰に与えたぞ」と問われれば、エソポ居直り申すは、「それはこなたのご大切に思わせらるる者に渡いてござる」と答え、(423-2)

⑨かの国の人どもエソポを見て、笑い嘲ることは限りがなかつたれども、エソポはこれをもものともせず、内裏に参つて、国王を礼拝してかしこまったを国王ご覽ぜられて、「さて高樓の作者は何と」と問わせらるれば、「各々召し具してござる、いづれの所に建立つかまつろうぞ」と奏すれば、(436-14)

⑩～⑬は、状態パーフェクトの意味を表す例である。⑩は、エソポがシャントに棺のうえに書いてある文字について説明する場面、⑪は、エルミッポがエソポを殺さず、棺に入れて置いたトリセロ王に報告する場面で、行為動詞の「入れて置く」、通達動詞の「書く」が用いられ、主体が変化した結果の状態に重点を置いており、アスペクト的に状態パーフェクトを表わしている。⑫は、狐が籠に魚が一杯入っているから、誰かを呼んでくると狼をだます場面で、唯一シテゴザル形のなかで自動詞の移動動詞「入る」が用いられ、状態パーフェクトの意味を表している。⑬は、シャントがエソポを連れて墓場へ行ったが、棺のうえに書いてある文字の意味をエソポは分かっていると答える場面であり、思考動詞「弁える」が用いられ、状態パーフェクトの意味を表している例である。

⑩シャントこれを見て食欲が俄かに起こって、エソポに約束を違ようとせられたれば、またその奥な石に五つの文字があったをエソポが見て言うは、「所詮この黄金をばシャントも取らせられな、その故はここにまた石に五字書いてござる、それというは、お、こ、み、て、わとあった、この心は、おというは、置くという儀、こというは、黄金という儀、みとは、見つくるという儀、てというは、帝王という儀、わというは、渡し奉れという儀でござる。しからばこの宝は国王に捧ぎようずるものぢや」と言うたところで、(420-5)

⑪エルミッポこの由を見奉り、「如何に君、かのエソポを成敗いたせと宣旨を下された時、あまり本意なさに、ある棺に入れ置いてござれば、まだ存命つかまつることもあろうずる」と奏すれば、(435-3)

⑫狐後から石をひたもの取り入るるによって、次第に重うなつて一足も引かれぬによって、後を見返り「魚が多う入ったやら、はや先へ行くことが叶わぬが何と」と問うた、狐「まことに過分に魚が入ってござるによって、我らが力では引き上げ難い、さらば誰ぞ合力に雇わう」とて、近い里に行いて、(466-19)

⑬エソポはもとよりその字面をよう心得てシャントに言うは、「我はこの謂れを弁えてござる、この所に過分の財宝がござる。それを願しまらしたらば、なにたる御恩賞にか預かろうぞ」と、(419-12)

例⑭は、エソポがシャントに珍物をもって喜んでいたと報告する場面であり、『エソポのハプラス』のなかでシテゴザッタが用いられた唯一の例であり、状態動詞「見える」を用いられているので、アスペクト的に継続の過去の意味を表している。

⑭シャント言わるは、「さてそれを受け取ってから何ともそれは言わなんだか」と問

わるれば、「何をも申すことはござ無かつたれども、心の内には一段と深いご大切のほどを喜ぶ依が見えてござった」と申した。(421-20)

3. 地の文での「シテ+存在詞」

『エソポのハプラス』の地の文のなかで現れる「シテ+存在詞」形式は、シテアル形・シテイル形・シテオチャル形である。

3.1. シテアル形

シテアル形は、『エソポのハプラス』のなかで地の文でのみ現れる。代わりに会話文では、シテアル形の敬体といわれるシテゴザル形が用いられ、会話文と地の文によってその役割が違ってくることがうかがえる。

例①～③は、地の文に用いられ、語り手の立場から過去のこととして、物事を提示する役割をはたすようである。①は、エソポの不思議な姿が恥ずかしくて、それを怪しんだ関守の質問に躊躇したあと、シャントがエソポを連れて館に帰った場面であり、移動動詞の「帰る」が用いられている。②は、リジャ国の貢物の要求に従う結論に至った場面であり、変化動詞の「終わる」が用いられている。③は、バビロニヤで国王の信任を得ていたエソポを妬んだ臣下が、エソポがひそかに他国へ移ろうとするという報告をしたのに対して、王がエソポに死罪を命じたところ、その報告が怪しいと思っていたエルミッポという他の臣下がエソポを殺したとバビロニヤのリセロ王に嘘の報告をする場面であり、通達動詞の「奏聞する」が用いられている。これらは、話が完全に一段落したり(①、③)、後に「されども」のような接続詞が付いたり(②)するなど話のシーンが変わるところに用いられ、動作そのものに焦点があたっている点から単なる過去の意味を表していると考えられる。

なお、ここでもう一つ考えなければならぬことは、地の文でのシテアルとタとの関係である。『エソポのハプラス』のなかで①～③のように、主節の述語として用いられている場合を調べてみると、「動詞・形容詞+タ」で終わる例は201例、シテアッタが3例、シテオチャルが2例、はだかの形が12例である。用例数からもみられるように、文末述語としては「動詞・形容詞+タ」で表現するのが主流である。ただし、はだかの形12例のうち10例は「～した」のあとに「申す」がそえられる場合がある。これは、「帝王も臣下も、その外下々の者どもも、「この人を師とせずは、誰人か師にせうぞ」と、感じ合はれたと申す。」のように「シタと申す」として用いられ、物語のチャプターが終わるところで現れる。シテアッタとともに「シタと申す」は古代語のケリ形の役割を果たしているとも考えられる。

①商人も、シャントも二人ともに「我が従人ではない」と言われたれば、その時エソポ「我には主人が無い、自由の身ぢや」と言うて喜べば、恥をも顧みいで、シャントも、商人も「これは我が所従ぢや」と言われた。とこうしてシャント我が館にエソポを連れて帰られてあった。(414-22)

②それよりやがてリヂャの国のクレッソと申す帝王より勅使を立てられ、「その里から年毎に過分の貢ものを捧げ奉れ、この勅定を背かば、ことごとくを攻め取りようずる」との儀であった。これによって所の人々「この勅定を背くまじい」と口を揃えて、同音に議定事終わってあった。(428-3)

③帝王これをご覧られて、今は疑うところも無いと仰せられ、エルミッポという臣下に仰せつけられて罪科に行えとの儀であった。エルミッポすなわちエソポを召し縛めて心中に思わるは、「さても世上に名を得たこの学者を殺そうことは本意ない、所詮身に罪を被るといふとも、命を継がうずる」と思い定め、密かにある片脇な棺に入れておき、「既に誅罰つかまった」と奏聞せられてあった。(433-19)

次の例④のアスペクトの意味は、動詞が表わす運動が終了限界に到達し、その結果として生じた状態が継続していることを表わす状態パーフェクトに該当する例である。これは、エソポがシャントに風呂屋にどのくらい人がいるか調べてこいと言われ、風呂屋に行ってみれば、店の前に石が出ていて、出入りの人の足に傷つけていたというところであり、変化動詞「出る」が用いられ、石が出ている状態に重点を置く状態パーフェクトの意味である。言いかえれば、非情物 (inanimate things) の主体である石の変化の結果の状態を表している。

一方、この例が①～③とは違って状態パーフェクトというアスペクトの意味を表しているのは、①～③のように主文の述語ではなく、従属節の述語として用いられていることと関係があるかもしれない。用例数が少ないため絶対とはいえないが、④の場合の用法は、「自動詞+シテアル」がアスペクト的に状態パーフェクトを表す後の時代の用法と関係があり、①～③とは、形だけ同じであって、その成立が異なる別の形式であるとも考えることができる。

④そこで人々も大きに笑うて赦いてやれば、それからエソポ風呂に行つて見るところに、その風呂屋の前に鋭な石が一つ出てあったが、出入りの人の足を破り、傷をつけたを、ある人がかの石を取つて、かしこに捨てたところで、エソポがそれを見て、たち帰つて、(417-2)

『エソポのハプラス』のシテアル形は、地の文にのみ見られており、タ形のシテアッ

タが用いられ、過去を表しているのが3例、状態パーフェクトが1例である。接続する動詞は、全てが自動詞であり、変化動詞が2例、移動動詞と通達動詞が1例ずつである。すでに述べたように、④の状態パーフェクトの意味を表す例は、近世における状態パーフェクトの意味をもつシテイル形がすでにここにその姿を現したものと考えることができる。

3.2. シテイル形

地の文において、シテイル形がアスペクティックに状態パーフェクトの意味を持つのは例⑤～⑧であり、他の例は継続か単なる状態の意味を表わしている。⑤は、シャントが酔っているとき、人と賭けをする場面であり、変化動詞「沈酔する」が用いられ、酔ったという変化の結果が持続する状態パーフェクトの意味を表わす。⑥は、棕櫚が普段風に強いと竹に威張っていて、強風のときもそのままの姿勢で立ち向かうが折れてしまう場面であり、再帰的な動作の「肘を張る」が、状態パーフェクトの意味を表わす例である。⑦の場合も、熊と獅子が立ち分かれている結果の状態に重点を置く状態パーフェクトの意味を表わしている。⑧は、変化動詞「寝入る」が用いられ、アスペクティックに状態パーフェクトの意味を持つ例で、蟹は蛇と親友ではあるが、蛇の意見を聞こうとしない様子に腹を立て、蛇が寝ている間に殺す場面である。⑤、⑦、⑧は、シテイル形のあとに「～ところ」が見られる従属節の述語である。

「シテイタところ」では、テンスを自分が表現するが、「シテイルところ」では、主文の述語にテンスを任せるといった違いはあるが、アスペクティックの意味はかわらない。

⑤ある時シャント沈酔してゐらるる所へ、人が来て「大海の潮を一口に飲み尽くさるる道があるか」と問うに、シャント「たやすう飲もうずる」と了承をせられた時、(4 17-17)

⑥しかるに棕櫚は兼日の利口の如く志を下さず、肘を張ってゐたを何かは堪よう、散々に吹き折って、根ごれになって果てた。(4 71-23)

⑦ある時羊の子一匹、熊と、獅子との二つの手に掛かって死んだ。この二つの獣互いに自他の勝負を争うて、朝から夕さきりまで戦えども、遂にその勝ち負けが見えいで、争いくたびれて、両方に立ち分かれてゐるところに、狐がよそからこれを見て、二つの中に置かれた羊を取って食ろうた。(4 77-22)

⑧蟹心中に殊のほか腹を立てて、「所詮かよの徒者を娑婆塞に生けて置いて、頭の痛いことを堪ようよりは」と思い、蛇寝入ってゐた所へそろそろ這い寄って、かの重代の鉞をもって首を鉞み切って殺いたれば。(4 95-20)

⑨は、わしが大法会に現れ、守護の指環を取って去った事件について、不吉と思った人達にその対策を聞かれたシャントが悩んでいる場面であり、思考動詞「案じ煩う」が用いられ、継続の意味を表わす。⑩は、泣いている子供に母が、泣くと狼にやるということを聞いた狼がそれを信じて待っている場面であり、動作の継続を表す。⑪は、狐は狼の餌をねらい、人に狼を殺すように仕掛けたが、狼を殺した人が、そのあと跡を追跡して狐を殺す場面、動作動詞「進退する」が用いられ、継続の意味を表わしている。

⑨心を尽くいて案ずれども、更にわきまゆる道が無かったによって、案じ煩うてゐらるる体をエソポ見てシヤントに問うは、(426-4)

⑩狼はこれ聞き、真かと思つて、「天晴れこれはよい幸せかな」と待ちかけてゐれば、日も漸々暮れ行いた。(499-3)

⑪次ぐ日またその所に出てみれば、右の狐かの狼の跡式を横領して、進退してゐたを、ともにそれをも打ち殺いた。(501-9)

⑫は、シャントがエソポに珍物を大切な者にあげるように命令したが、エソポはわざとシャントがかわいがっていた犬にあげ、シャントの妻はシャントに犬より愛されていないと思ひ、腹を立てている場面である。状態動詞「つつくすむ」は、重々しくかまえるの意味として捉えることができるため、アスペクト的に単なる状態の結果の意味を表わしているといえる。

⑬そうある所へシャント帰宅して女中に向こうて、例の如く、言葉を掛けられるれども、かつて女房は返事にも及ばずつつくすんでゐたが、腹こそ立つつらう、「いかにシャント、お聞きあれ。そなたと我は縁こそ尽きつらう。…」と言ふによって、(422-7)

地の文でのシテイルは、シテアルのような文末で用いられる例は見られず、主に文中に現れる。会話文とは違って文末に使われていないことは、シテアルと比べ、まだ地の文では積極的にはテンスを表していないと考えられる。

3.3. シテオチャル形

この節では、シテアル形とシテゴザル形を分けて調べたことと同様、シテイル形とシテオチャル形も分けて分析してみる。『エソポのハプラス』のなか、シテオチャル形は地の文で2例が存在する。

⑬と⑭は、通達動詞の「答える」、移動動詞の「立ち去る」が用いられ、結果に焦点

があるわけではなく、語りの過去に近いが、アスペクト的に動作パーフェクトの意味を表わしているとも考えることもできる。シテアル形とシテゴザル形の場合、シテアル形が地の文専用形式で、シテゴザル形は会話文専用形式であるのに対して、シテイル形は会話文・地の文問わず用いられているが、地の文では主節の述語として使われる例がない。それに対し、シテオチャル形は主節の述語として用いられている。

地の文で主節の述語として使われているシテアル形は、ケリ形と同じく物語叙述に用いられたものであると考えることができた。同様に、シテオチャル形は語り手の立場からの説明であるが、テンス的に現在であると考えられる。

⑬ 狼これに怒って言わるるは、「おのれは風呂にただ一人あると言うたが、この群集は常よりも多いは 何事ぞ」と、エソボ「この風呂屋の入口に尖った石があって、出入りの人の仇となったを たれも取り捨ていで人毎に躓き倒るれども、顧みなんだをある人一人きて取って捨ててござれば、知分の程のただ一人なことを申した」と答えておぢやる。(417-16)

⑭ 狼これを聞いて、大きに怒り、「おのれは何事を言うぞ？我こそ恩を与えたれ、ただいま汝が首を切り食らうずるも我がままであつたれど、差し置いて助けたことをば恩と思わぬか」と言えは、ズルは無益の辛勞をして立ち去つておぢやる。(447-16)

4. まとめ

『エソボのハブラス』の「シテ+存在詞」の会話文・地の文での使用様相は、つぎの表のようである。

	会話文	地の文
シテアル	0	0
シテアツタ	0	4
シテイル	1	9
シテイタ	3	8
シテゴザル	15	0
シテゴザツタ	1	0
シテオチャル	0	2
シテオチャツタ	0	0

これまで、時間的基準点の明確な会話文とそうではない地の文とでは、テンス・アスペクトの意味のあらわれ方は当然異なるはずであるので、両者を分けて分析した結果、標本がきわめて少ないため断言できないが、シテアル形の場合、状態パーフェクトの意味をもつ例④をのぞいて、『エソボのハブラス』のシテアル形は語りの過去の意味しか

持っていないことになり、それはケリ形の代替として用いられたものと考えられる。それに対して、④で見られるシテアル形はタリの衰退で新しく「シテ+存在詞」形が必要になり、台頭した形式だと考えることができる。もし、室町期に生まれたシテアル形が、状態パーフェクト → 動作パーフェクト → 過去という一般的なアスペクト的意味の変化を受けたとするなら、『エソポのハプラス』のシテアル形の大部分は、すでに過去という意味まで進んでいるので、状態パーフェクトの意味を普通に表す近世的なシテアル形とは異なると思われることができる。つまり、『エソポのハプラス』のシテアル形は、ケリのように文語的な語り口を目指している古風な言い方として用いられるシテアツタと、近世的なシテアル形が共存する同音異義形態である。

シテゴザル形の場合は、シテアル形とは違って会話文専用の形式として用いられ、焦点が運動の結果に当たっており、アスペクト的に動作パーフェクト、状態パーフェクト、継続の意味を表している。主に、ル形であるシテゴザルが用いられる点は、テンス的な発達が不完全であると考えられる。

シテイル形の場合、『エソポのハプラス』では、会話文・地の文問わず、アスペクト的に動作パーフェクトの意味として使われる例が見つからなかった。全体的に、動作や状態の継続を表わす例が相当みられ、その点、現代語のシテイル形とのつながりがうかがえる。なお、地の文でのシテイルは、シテアルのように文末に用いられ、物語的語りを表す例は見られず、従属節に現れる。会話文とは違って主文の述語として使われていないということは、シテアルと比べ、まだ地の文では十分なテンス的意味を表せないと考えられる。一方、シテイル形のテンス的な意味は、そのアスペクト的意味にかかわらず、シテイルは非過去の意味を、シテイタは過去の意味を表わしている。

シテイル形が地の文であまり用いられないのを補う形式として、代わりにシテオチャル形が用いられ、『エソポのハプラス』では、シテアル形—シテゴザル形、シテイル形—シテオチャル形が会話文・地の文により使い分けられているのではないかとも思われる。

[参考文献]

- 大木一夫 (1998) 「古代語「けり」の意味機能とテキストの型」『国語論究7 中古語の研究』、明治書院
- 鈴木 泰 (1999) 『改訂版古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』、ひつじ書房 (1992 初版)
- (2004) 「日本語の時間表現」『日語日文学研究』50、韓国日語日文学会
- マスロフ・菅野裕臣 訳 (1992) 「アスペクト論の基本概念について」『動詞アスペクトについて (II)』学習院大学東洋文化研究所調査研究報告No 35
- 柳田征司 (1986) 「近代語「テアル」」『愛媛国文と教育』19
- (1991) 『室町時代語資料による基本語詞の研究』、武蔵野書院

- 山口堯二（1997）「完了辞・過去辞の通時的統合—「た」への収斂—」『日本語文法 体系と方法』、
ひつじ書房
- （2003）『助動詞史を探る』、和泉書院
- 山下和弘（1986）「「タリ」と「テアリ」」『語文研究』66・67
- （1996）「中世以後のテイルとテアル」『国語国文』65-7
- 山田小枝（1988）『アスペクト』、むぎ書房
- 湯沢幸吉郎（1929）『室町時代の言語研究』、大岡山書店
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

(イー チュンギョン 大学院人文社会系研究科 博士課程1年)